

無機質界

茲で、愈々細菌發生の原理と其順序をかいてみるが、抑々細菌という有機物は、現在最も進歩した原子顕微鏡でも、六万倍迄しか見へないとされており、之が現在迄の限度ではあるが、無論極点ではない。何れの日か顕微鏡の發達は、超微生物迄をも捕捉出来るようになる事は予想されるが、問題は只其時期である。先ず現在の程度から推しても、ずっと先の事と見ねばなるまい。

そうして科学の現在であるが、唯物的に見れば最早其極点に迄達しており、次の世界である処の無機質界の一步手

前迄来ていて、大きな壁に突き当たっているという状態にあるという事だ。従って其壁を突き破って了えばいいのであるが、実はそれが容易ではない。処が仮令壁を突き破り得ても其先が問題である。というのは其先こそ唯物科学では到底捕捉する事の出来ない、言わば無に等しい世界であるからである。

それに就いては、彼の湯川博士の中間子論であるが、勿論同博士は、理論物理学専攻の学者であるから、最初理論によって中間子の存在を発表した処、偶々他の学者が宇宙線を写真に撮影しようとした際、中間子である幾つかの素

粒子が乾板に印影されたので、茲に博士の理論は、実験的に確認された訳である。つまり実験物理学によって裏付けされたので、ノーベル賞獲得となったので、之は普く知られている通りである。処が私の唱へる説も理論神霊学であると共に、此応用によって素晴らしい治病の効果を挙げているのであるから、実験神霊学としての立派な裏付けも完成しているのである。としたら科学的に言っても如何に大なる発見であるかが分るであろう。

之を一層判り易く言えば、唯物科学の到達し得た処の極致点が、現在の原子科学であるとしたら、其次の存在であ

る処の世界、即ち私の唱へる無機質界が明かにされたのであるから、科学上からいっても、実に劃期的一大進歩と言えよう。そうして此世界こそ曩に述べた如く、科学と神靈との繋りの存在であつて、今茲に説く処の此文は、つまり科学界と神靈界との中間にある空白を充填した訳である。実に此空白こそ今日迄科学者も、哲学者も、宗教家も知らんとして知り得なかつた処の、神秘的謎の世界であつたのである。勿論以前から智識人の誰もが心の奥深く内在していた処の、真理探究の的そのものが、愈々茲に暴かれたのであつて、長い間の理想の夢が実現されたのである。然し

文化の進歩は、何時の日かは此神秘境に迄到達されなければならぬ事は、誰も予想していたに違ひないが、多くの人達は無論科学の進歩によるとしか想つていなかった事も肯けるが、意外にも其予想は裏切られ、私という宗教家によつて発見されたのである。けれ共、單に捉へただけでは何等の意味もなさないが、要はそれを活用し、普く人類の福祉に役立たせてこそ、初めて大なる意義を生ずるのであるが、此事も期待に外れず、病患の九十パーセント以上は完全に治癒されると共に、人間寿齡の延長までも可能となつたのである。

以上の如く、此大発見によって、人類に与へる恩恵は、到底言葉や文字で表はす事は出来得まい。従つて此事が世界人類に普く知れ渡つた暁、現代文明は一大轉換を捲き起し、人類史上空前の一新紀元を劃する事とならう。茲に到つては最早科学も宗教もない、否、科学でもあり、宗教でもあり、未だ人類の経験にも、想像にも無かつた処の、眞の文明時代出現となるのであらう事は、断言して憚らないのである。偕て愈々無機質界と物質界との關係に移るとしよう。